

# 湖北の宣講書『勸善録』残本について

阿部泰記

## 一 はじめに

上海図書館古籍目録には清孔継品『勸善雑録』と題する善書を蔵しており、第一卷十一篇の故事を収録しているが、筆者が考察するに、この書の書名は『勸善雑録』ではなく『勸善録』と訂正すべきである。また孔継品は編者ではなく刊行に出資した人物の一人に過ぎない。『勸善録』は完本ではなく、上海図書館蔵本（巻二）の他に、孔夫子旧書網広告本（巻一、巻三）、及び個人所蔵の複写本（巻四）があり、これらの残本を総合すると、現存するテキストは三卷三十七篇となる。本書は湖北で編集され刊行された宣講書であり、収録された故事の文体を検証すると、代言体と叙事体の歌唱を巧みに使用して感動的な物語を展開している。本論では異なる所蔵者のもとにある各巻を照合して全体の概要を確認し、その特徴を分析してみたい。

## 二 残巻の全容

『勸善録』は巻一、巻三、巻四の三巻が現存しており、各巻の所蔵者

と収録する内訳は以下ようになる。

### 1. 巻一

#### i. 「清孔継品『勸善雑録』」

上海図書館古籍目録には清孔継品『勸善雑録』と題する残本を蔵しており、第一卷十一篇の故事を収録しているが、全体の巻数と故事数は不詳である。版心には故事名だけを記して、巻数を明記していないものが多い。ただ「変牛償債」「大士救難」だけは版心に書名（『勸善録』）、巻数、葉数を記しており、葉数が通しであることから、本書は『勸善雑録』ではなく『勸善録』だと称すべきである。

また本書は義捐によって出版された善書であり、「宣講解冤」「施公奇案」には「孔継品敬刊」、「司命顕化」には「当邑弟子陶徳宣敬刊」と刻している。言うまでもなく孔継品と陶徳宣は出版費を支援した信徒であり、従って上海図書館古籍目録のように孔継品をもって本書の編者とすることはできない。また当邑は当陽を指し、湖北省に属する県であり、この故事が当陽県で刊行されたことがわかる。

版式は半葉九行、行二十字であるが、「淫悪巧報」「欺貧賭眼」「善全孝友」の一部は半葉八行、行二十字で、全体の版式は不統一である。

今、所収の作品名と版心の巻数・葉数表記を記すと、「守財奴」上巻・下巻（存第十二～二十五葉）、「宣講解冤」（第二十六～二十九葉）、「施公奇案」（第三十～三十五葉）、「溺女現報」（第三十五葉）、「変牛償債」（巻一、第三十六～三十八）、「淫悪巧報」（第三十八～四十七葉）、「大士救難」（巻一、第四十七～五十二葉）、「昧心急報」（第五十二～五十六葉）、「欺貧賭眼」（第五十六～六十葉）、「善全孝友」（存第六十葉）、「司命顯化」（存二葉、破損）の十一篇となる。

## ii. 「木刻本『勸善録』一冊」

二〇一一年六月に河南省鄭州市の三石書屋が孔夫子旧書網に「木刻本『勸善録』一冊（内有「守財奴」「施公案」等十五段）」という販売広告を出した。表紙には表題「勸善録」及び販売店「禧元記」が墨書されている。封面は「光緒十九年（一八九三）重刊／勸善録／張接港両儀堂藏板」。版式は半葉九行、行二十字で、上海図書館蔵本と同版である。「張接港」は荊州府荊門県に位置する一港湾であり、本書が湖北で刊行されたことを知る。

冒頭の「趙大真君敘」は民間の善堂が祭る神明が述べた序文であり、聖諭宣講の故事が実話を採集したもので、模範的な人間となる手本として学ぶべきこと、歌唱形式によって雅俗ともに楽しめることを述べている。

続く「首巻目録」には、序（趙大真君敘）、郭輪岫敘、および「誠孝格天」「孝婦逐疫」「逆子遭譴」「守財奴」「宣講解冤」「施公奇案」「溺女現報」「司命顯化」<sup>4</sup>「変牛償債」「淫悪巧報」「大士救難」「昧心急

報」「欺貧賭眼」「善全孝友」十四篇を掲載しており、上海図書館蔵本の「守財奴」の故事の前に、「誠孝格天」「孝婦逐疫」「逆子遭譴」三篇を収録していたことが知れる。この三篇は湖北当陽県の曾得宗の義捐によって刊行された故事である。

## 2. 巻三

### i. 清代抄本『勸善録』一冊全

孔夫子旧書網には二〇一一年八月に湖北省宜都市の古籍旧書店が「清代抄本『勸善録』一冊全」の販売広告を出した。半葉八行、行二十字。原版の版式を模したものと思われる。「勸善録三巻目録」によれば、「江生遊冥」「鴨還錢」「猪償債」「孝逆速報」「焚書滅寿」「竈王救劫」「繼母不賢」「溺女慘報」「木匠做官」「救女獲福」「活変猪」「夢変猪」「烈女尋夫」「陰隲得妻」十四篇を収録する。そのうち「江生遊冥」（荊門）、「鴨還錢」（馬家湖）、「孝逆速報」（沔陽、蘄州）、「焚書滅寿」（沙市）、「繼母不賢」（漢陽）五篇が湖北の故事である。

### ii. 李洪源複写本

李洪源氏（湖北省仙桃市民間芸人協会会長）所蔵の複写本は、版式が半葉九行、行二十五字で、版心にはすべて、書名「勸善録」、巻数、及び葉数を刻する。その中で巻三は「烈女尋夫」末尾（四十六葉裏）<sup>5</sup>と「陰隲得妻」（四十六～五十四葉）の二篇を収録する。この二篇は清代抄本巻三の目録の篇名と一致していることから、版式は異なるものの、複写本は清代抄本と同じ内容のテキストであったことがわかる。

## 3. 巻四

### i. 李洪源複写本

李洪源氏所蔵の複写本の巻四に収録する故事は、「兩世合指」(四葉)、  
「因妻免禍」(十六葉十九葉)、「応該餓死」(十九葉二十三葉)、  
「遺画成美」(二十三葉二十八葉)、「節孝双善」(題目のみ、二十八葉  
〜?)、「題目不詳」末尾(?)四十二葉表)、「好賢妻」(四十二葉  
十六葉)、「好兄弟」(四十六葉四十九葉)、「好朋友」(四十九葉五十二  
葉)の九篇であるが、一葉四葉、十一葉十六葉表、二十八葉裏四  
一葉、及び五十三葉以後を欠いており、複写本の巻四はあるいは他の  
巻と同じく、全体で十四篇ほどの故事を収録していたと思われる。

### 三 故事の概要

光緒本には「郭輪咄敘」を掲載せず、直ちに「誠孝格天」の本文を  
掲載する。各故事の概要は以下のごとくである。(一)内は宣詞の詞  
体と句数を示す。

巻一「誠孝格天」(当邑曾得宗敬刊)―版心「誠孝格天」。一五葉。  
半葉九行、行二十字。『宣講集要』巻十四「誠孝格天」を転載。宣詞は  
代言体と叙事体を併用。冒頭に『聖諭』一条「敦孝弟以重人倫」の主  
旨を説明し、咸豊七年(一八五七)湖北省施南府咸豊県(湖北)の孝  
子劉光貴の故事を案証として挙げる。「光貴は苦勞して盲目の母曾氏を  
養う。曾氏が早く死んで面倒をかけたかと言わないと言うと(十言二十句)、  
光貴は母の世話をするのは当然だと答える(十言十二句)。光貴が母の

ことを気にながら田で草を鋤いて除いていると地震が起き、不思  
議なことに家屋が二里あまり離れたところに移されて被害を免れたた  
め、神に感謝する(十言二十二句)。甥の劉玉連が来て天が曾氏に同情  
し光貴の孝心に感動して奇跡を起こしたと語っていると近所の人が来  
て役所に申し上げようということになり(十言十六句)、県令が府憲に  
報告し(十言四句)、府憲は道憲に碑を立てるよう申し上げると言う  
[十言四句]。府憲は光貴を模範とするよう民衆に説いて碑を立て皆が  
見に来る(十言二十六句)。」

「孝婦逐疫」<sup>7</sup>(当邑曾得宗敬刊)―版心「孝婦逐疫」。五七葉。半  
葉九行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体を併用。「順治年間、晋陵  
(江蘇)の顧成の長子元培は怠惰であった。妻錢氏が諫言すると(七言  
十六句)、元培は改心する。顧成夫妻が喜んで錢氏に感謝すると(十言  
十二句)、錢氏は当然のことだと言う(七言十句)。順治八年(一六五  
一)に疫病が蔓延して顧成一家は感染する。実家にいた錢氏は父母の  
世話をしなければと言つて帰宅する(十言十二句)。顧成が疫病に苦し  
んでいると疫病神が孝行な嫁が帰宅したので回避すると話すが聞こ  
えて病気が治癒し一家は繁栄する(十言三十句)。」

「逆子遭譴」(当邑曾得宗敬刊)―版心「逆子遭譴」。七九葉。半葉  
九行、行二十字。『宣講集要』巻十四「逆子遭譴」を転載。宣詞は代言  
体。冒頭に不孝に対する悪報を述べると説く。「長溪地方の農民馮思  
仁と妻王氏の金子金保は陳家に養子となつて陳元と改名し漁業を営む  
が生みの父母を思わない。王氏は苦勞して育てた息子を思つて会いに

行く(十言十八句)。陳元は何しに來たと王氏を罵る。王氏は養育の恩を忘れた息子に悲憤して帰ろうとする(十言十二句)。陳元の妻は魚を捕つて母をもてなすよう夫を窘める(十言六句)。陳元は大漁であったが魚を隠す。陳元は母をもてなした妻を責める(十言十二句)。陳元は大蛇に変化した魚に噛まれて人事不省になり真夜中に目が醒める。陳元は閻魔から世人に勧告せよと言われたと妻に告げる(十言十六句)。陳元は頭を斬られて死ぬ。」

「守財奴」上下二卷。―版心「守財奴」。十、二十五葉。半葉九行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭吝嗇を戒める詩を記す(七言八句)。「(上卷)宋朝、下梁曹州曹南(山東)の秀才周榮祖の祖先は善行に努めていたが、父周奉は財を重んじ経堂を毀したため病死する。榮祖は妻張氏に科挙を受験したいと相談し、家は老僕に任せ一子長寿を連れて上京する(七言二十句)。曹州の賈仁は貧乏で東岳廟に住んでいた。賈仁が貧乏の原因を東岳帝に尋ねると増福神が前世で不信心であったためだと報告し賈仁が懺悔したため帝は周榮祖と禍福を入れ替える(十言七十句)。かくて榮祖の家は火事に遭い、賈仁は焼け跡から埋藏金を得て裕福になる。だが賈仁と妻は吝嗇で子供がでず陳徳輔の仲介で養子を探す(十言二十四句)。榮祖は科挙に落第して帰郷し家を手放したことを知る。榮祖は悲嘆し風雪を避けて酒屋に入る(十言十八句)。店主は夫婦に酒を勧め、泣く長寿を見て買家の養子の話をして榮祖が承諾したため徳輔を呼びともに買家に行く(十言六十八句)。(下卷)冒頭に金を貯めても善行を積まなければ無駄になると説く(十

言十二句)。徳輔は榮祖を賈仁に紹介する。賈仁は榮祖の子を見て喜び契約書を交わし、洪々代価は一串銭と言ふ(十言一百四句)。陳徳輔は申し訳なさそうに一串銭を夫妻に渡すが夫妻は納得しない(十言十八句)。賈仁は徳輔が給料から銭を補填すると言ふと喜ぶ。賈仁は自分はどうしようもなく吝嗇なので徳輔に早く帳簿に記すよう促す(十言十二句)。徳輔は事情を話して夫妻に銭四串を渡す。周秀才は子に詫言妻は悲しんで息子に別れを告げて徳輔が連れ去る(十言十六句)。長寿は賈仁を親として育ち継志と改名する。賈仁は危篤になり継志を東岳廟に行かせ病氣快復を祈願させる。継志は賈仁を欺いて大金を持つ参して参拝し和尚に金を渡して廟内にいた老人夫婦を追い出す(十言四十句)。継志は後悔して善行に努める。廟内にいた夫婦は周秀才夫妻であり曹南に帰ろうとして妻が病氣になるが徳輔の薬を飲んで快復し息子の消息を聞いて再会を手配してもらふ(七言四十句)。徳輔は継志に父母の到来を知らせる。継志は父母に再会して廟での非礼をわび父母は再会を喜ぶ(七言十四句)。継志が父母に献上した金銀は祖父の遺産で豚小屋に隠したものであった。徳輔はそれを聞いて元の持ち主に返つたと喜ぶ(十言十二句)。継志は徳輔と店主に謝礼して父母を家に迎える。榮祖は子に家の没落の因果を語り経堂を再建させる(十言二十句)。」

「宣講解冤」(孔繼品敬刊)―版心「宣講解冤」。二十六、二十九葉。半葉九行、行二十字。「宣講集要」卷十四「宣講解冤」を転載。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に「聖諭」十六条「解仇忿以重身命」について

来世で報復する話をする」と説く。「荊州府枝江県江口後郷（湖北）の農民趙文漢の妻笥氏は咸豐九年（一八五九）に人事不省となる。姑と夫は驚いて嫁の実家に知らせ笥家の人々が来る（七言二十六句）。叔母は蘇生を待てばよいと言う。皆が見守っていると翌日息を吹き返す（七言六句）。笥氏は母に明日死ぬと告げられたと語る。夫を殺して人妻を奪った罪と告げられたと言う（七言四句）。自分は女子だと告げたと言う。前世は湖南岳州の蔡貴で妻何氏の醜貌を嫌って離縁し五陵の王有昇を船から突き落として妻彭氏に言い寄ったが彭氏が入水自殺したと告げられたと言う（七言四十句）。自分は地獄で笥家の娘に転生し短命で死ぬ審判を受けたと言う（七言十四句）。何氏の舅が冥界に赴いて王有昇の霊を説得し暫時蘇生することができたと言う。文漢は信じて妖怪と罵る（七言十句）。笥氏は空中にあがる。有昇の言葉を話して笥氏を捕らえて行くと言う（七言四句）。笥氏は何氏の舅の声で有昇を制止し文漢に萃善壇で宣講を開催させる。宣講が開かれ観音が降臨して訓辞を垂れ死者は転生する（七言二十八句）。」

「**施公奇案**」<sup>10</sup>（孔継品敬刊）―版心「施公奇案」。三十―三十五葉。半葉九行、行二十字。「宣講集要」卷十四「施公奇案」を転載。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に「聖諭」十六条「解仇忿以重身命」に関連して仇忿は酒によることが多いと説く。「淄川（山東）の鄭倫が負債を償還した残り銀三百両を妻の兄胡成に預けると、胡成は酒に酔って隣人馮安に行商人を殺して金を奪い死体は南山の井戸に棄てたと放言する。馮安は復讐する好機だと考えて名判官の施愚山に訴える。胡成

は鄭倫から預かった金だと弁明し鄭倫も証言するが（七言二十二句）、馮安は南山の井戸を調べるよう嘆願し（七言四句）、首無し死体が発見され（七言四句）、胡成は馮安の畏だと訴える（七言十四句）。施公は二人が犯人ではないと考え、死体を確認した者に銀三百両を与える」と布告する。郎氏が出頭して夫何甲が交易から帰らないと言い死体の特徴が一致する（七言十八句）。郎氏は夫の死体を見て狼狽する（七言十四句）。施公は何甲の首に懸賞金をかけると寡夫王五が出頭する。施公は王五に首をどこで発見したか審問する（十言六句）。王五は作り話をする。施公は王五になぜすぐに発見できたかを質す（十言六句）。郎氏は施公を非難する。施公は郎氏を罵り王五と共に謀して何甲を殺したと断言する（十言十二句）。郎氏はなお反論する。施公は死体を見ずに亡夫とわかるわけがないと反論する（十言四句）。施公は懸賞金で試したと言う。施公は何甲が貧乏で金があるはずがないと言う（十言八句）。施公は郎氏らを処刑する。施公は「勸世歌」を作って戯れ言を戒める（十言十八句）。」

「**溺女現報**」―版心「溺女現報」。三十五葉。半葉九行、行二十字。「宣講集要」卷十四「溺女現報」を転載。宣詞は代言体と叙事体。「咸豐七年（一八五七）、荊州（湖北）の李和が溺死させた長男と次男の娘に取り憑かれる。李和は泣いて妻に『溺女歌』を歌う（七言二十四句）。」

「**変牛償債**」―版心「勸善録」。三十六―三十八葉。半葉九行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭は前世の負債を償還するという詩

(七言十句)。「道光二十九年(一八四九)、武昌縣松滋鎮采穴(湖北)

の雜貨店の店主高德盛の子毓靈は劉正謨と合資して問安寺(枝江縣)で雜貨店を開く。毓靈は資金を正謨に預けて帰郷する(七言十九句)。

正謨は遊蕩してその金を使い果たす。正謨は毓靈に事実を語り儲かったら返却すると言ふ(七言十四句)。正謨は神に誓つて牛馬に交じて返還すると言ふ。毓靈は不運だったあとあきらめると言ふ(七言八句)。

毓靈は金ができた時に返せばよいと言ふが正謨は咸豐元年(一八五〇)に河南大明府で凍死して毓靈は咸豐二年に帰郷して夢を見る。夢で正謨が牛になつて借金を返すと言つたため毓靈は家僕に確かめさせ(七言十六句)。水牛が生まれており売値は二十串であった。」

「淫惡巧報」——版心「淫惡巧報」。三十八、四十七葉。半葉八行、行二十字。「宣講集要」卷十四「淫惡巧報」を転載。宣詞は代言体と叙事体。「咸豐己未九年(一八五九)、湖北省荊州府江陵縣方城下街での事件。閨廟裏の劉有元が馬道松の子が内蔵を吐かされるところを見る。また本街の王光宗の子が腸を引き裂かれて殺害される。光宗と妻は悲しむ(十言八句)。劉老爺は訴えるべきだと考える。劉老爺は門生謝秉圭と相談して訴えることにする(十言十句)。皆は賛同するが光宗だけは反対する。光宗は前世の定めであり訴える必要はないと言ふ(十言八句)。だが兄弟の意見によつて訴える。江陵縣の張県令は現場に赴いて検屍する。張県令は殺害の理由がわからず神に祈り劉老爺を訪ねる(十言十八句)。荊州府は賞金を懸けて調査しても解明できないが、觀音大士と鎮江王爺が降臨して犯人は尹正順だと指摘する。正順は董陶

氏と共謀したと供述する。正順は董陶氏と姦通して応報を被つたと言ふ(十言十六句)。正順は光宗の妻陳氏が子春生に光宗と姦通した陶氏とその夫を罵らせたと言ふ。正順は陶氏に替わつて陳氏の子を殺して陶氏の歎心を買つたと自供する(十言六十八句)。尹は処刑されてその死体は豚や犬に食われる。」

「大士救難」——版心「勸善録」。四十七、五十二葉。半葉九行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体を交える。冒頭に至誠は神を感動させ觀音大士が救済すると説く。「荊州西城灣(湖北)の郭玉輝は継母に仕えて龍山寺の觀音に絶えず参拝していた。乾隆戊申(一七八八)六月洪水が荊州城を掩うが筏に乗つた僧に救われる(七言二十句)。僧は郭一家に食糧を与える。僧は水に落ちた老父を救う(十言十八句)。僧は石首縣無奉寺の方願參と称し龍山寺で再会すると告げる。玉輝は食事を心配する門人劉宗茂に觀音齋があると説き宗茂も納得する(七言十四句)。麦碗面が入つた壺が流れて来て玉輝は飢えを充たす。沙市の叔父の船に乗り転覆しそうになるが僧が救う。龍山寺の住職は僧が觀音大士だと教える(十言三十句)。これより觀音信仰が盛んになる。」

「昧心急報」——版心「勸善録」。五十二、五十六葉。半葉九行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。「道光年間、広東仁化縣の商人吳玉連は子大徳に荊州府江陵縣(湖北)の総頭下兆愷を義父として拜させるが、兆愷は禁令を恐れて大徳が預けた鴉片を騙し取る。兆愷は確かに預けたと言ふ大徳を罵り官に訴えると騒ぐ(七言十八句)。兆愷は家人に大徳の後をつけさせる。大徳は自殺しか無いと悲嘆する(七言二十句)。

家人が大徳の自殺を報告すると兆愷は喜ぶ。翌日総頭馮連陞が死んで蘇生する。連陞は冥界で大徳が兆愷を訴えていると告げる〔七言二十句〕。兆愷は恐れる。兆愷は家族に死期を告げる〔十言十四句〕。兆愷の家は没落する。〕

「欺貧賭眼」<sup>12</sup>―版心無題。五十六〜六十葉。半葉八行、行二十字。『宣講集要』卷十四「欺貧賭眼」を転載。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に貧乏を馬鹿にすべきではないと説く〔七言四句〕。「本朝乾隆年間、山東の程慶雲は高齡で子供がなく貧乏で妾も娶れず『呂祖醒心經』を念じて子孝思を儲けるが夫婦は死亡し孝思は布政使を退官した胡銀台の書記となる。銀台は孝思の読書の声を聞いて気に入る三女の婿とする〔七言六句〕。孝思は学問に励む。だが兄嫂に白眼視され夫婦は茅屋に住み三姑の内助で孝思は科挙を受験する〔七言二十二句〕。孝思は落第するが呂祖の援助を受けて上京する。銀台の八十の誕生祝いに三姑は礼物が無く姉たちから嘲笑される〔七言三十二句〕。二女の侍女春香は孝思が出世しないことに目を賭ける。そこへ孝思が西台御史を任命した朗報が届くと兄嫂は三姑に敬意を払い春香は三姑の侍女に目をえぐられ孝思と三姑は呂祖のおかげで出世する〔七言四十二句〕。」「善全孝友」<sup>13</sup>―版心無題。六十〜六十葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体。「昔、趙彦霄は兄彦栄が諫言を聴かず分家を主張し遊蕩して破産したため家に招いて説教する。彦霄は兄が後悔したので再び一緒に住むと言う〔七言十六句〕。彦霄は彦栄の借金を返済して父子は科挙に及第する。』

「司命顯化」(当邑弟子陶徳宣敬刊)―版心「司命顯化」。六十一〜六十九葉。半葉九行、行二十字。『宣講集要』卷十四「司命顯化」を転載。宣詞は代言体。冒頭に竈を敬うべきだと説く〔七言十八句〕。「荆州城外(湖北)の戴宜正夫妻は聖諭を聞き竈を敬っていたが長子元富は因果を信じず竈神に連行されて冥界で打たれる。次子元貴の徒弟張茂林は竈君を侮っていた。戴母は茂林を戒める〔十言十八句〕。茂林は悔悟せず竈王の譴責を受ける。人々は驚いて竈君にわびる〔七言十四句〕。茂林は竈君に冥界に連行されたと語る。茂林は冥界で祖母の仲介で救われ善悪殿で元貴の名を見たと言う〔十言三十四句〕。元貴は冥界に連行されて信じる。元貴は母に判官の帳簿に前世で汚職し退職後に善行を施したため人に転生したが因果を信じないため地獄を見せられたと語る〔十言四十四句〕。第一殿に連行されて恐れたと言う。』<sup>14</sup>

卷三「江生遊冥」―一葉。半葉八行、行二十字。宣詞なし。文語体。「荆門(湖北)の江興本は代々書記を務めていたが、道光丙申(一八三三六)に法を曲げて州知事に罷免されても反省せず、己亥年(一八三九)の冬、夢で冥界に遊び、「増減福寿関」で自分の名の下に「革」字を見て不思議に思うが、孫姓の妻を強引に娶ったため、父母が刑罰を受け、興本は寿命を奪われることを知る。』

「鴨還錢」―一葉。半葉八行、行二十字。宣詞なし。文語体。「馬家湖(湖北)の張叟は豚の解体を得意としていたが、雛を温めていた雌鴨が年末の夢に現れて、自分は鄭某で生前に借りた穀物一石(一串五百鈔)を返済したので、次は董洪昌に返済に行く」と告げて去り、董の

妻に殺される。咸豊二年の事、同里文生の話。」

「猪債償」——三葉。半葉八行、行二十字。宣詞なし。文語体。「江邑<sup>15</sup>管口の王金は木工曾開成の鈔八串を返さず、豚となって曾に鈔三串で買われ、肉屋に十一串で売られる。咸豊三年の事。」

「孝逆速報」——三〇九葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に「聖諭」第一条を説く。「乾隆年間、沔陽（湖北）の蘇大順は監利県（湖北）で嫖賭にふけり、犬の解体を好んでいた。父正明は悪行を戒める（十言三十六句）。だが大順はますます凶悪になり、雷神の怒りを買って食べ物が蛇に変化し食べて苦しむ。大順は死ぬこともできず泣いて舌を噛んで死に隣家の蔡從安が歌を作って伝える（十言四十八句）。又、蕪州大同県の王元長は孝順で父居仁の留守中に母が死に、道光七年の洪水で棺を守って共に流されるが天地が感動して棺を故郷に帰す。元長は帰郷した居仁を慰め近所の者は元長の孝心を賛美して生活を援助し陳翁の娘翠蘭との懇談を勧める（十言六十句）。元長は推挙されて州学に入學する。巡道はその孝心を称えて歌を作る。」

「焚書減寿」——一〇一十七葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に富貴は善行によると説く。「湖北省荊州府江陵県沙市の陳徳光の養子元龍は學業に務めず賭博にふけり兄洪仁と分家して困窮する。母が元龍を戒めると元龍は賭博をすれば寿命を縮めると誓う（七言六十句）。元龍は反省して道光三十年に宣講を開き善書を印刷するが、咸豊三年に宣講が禁止されると関与を恐れて善書を焼却する。元龍は突然氣絶して冥界で寿命を削減されたことを母に告げる（十言八

十八句）。元龍は衆人に別れを告げる（十言十六句）。元龍は二子に訓戒する（七言二十六句）。文昌帝君は衆人に元龍の短命は善行を貫徹しなかったからだと告げる。」

「竈王救劫」——一七七〇二十一葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に女子は一家の主人である竈君を尊重すべきことを説く。「湖北襄陽府の常滋は竈君を崇敬していた。常滋は妻何氏を戒めて山西省の兪良臣が善行を重ねながら不幸に遭ったわけを青衣の竈君から本心からの善行ではなかったと責められて竈君を敬重したことを説く（十言二百二十句）。村人たちは話を聞いて司命廟を立てて竈君を祀る。」

「繼母不賢」——二二一〇二十九葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。「咸豊三年（一八五三）、咸陽府白水鋪（陝西）の曾朝貴は王氏と結婚して一子長寿を儲けるが、王氏は一年もたたず重病に倒れる。王氏は朝貴に後を託し憂慮する朝貴に村人は葬儀を促す（十言三十句）。朝貴は乳母を雇用する。近所の胡成名は朝貴に再婚を勧め朝貴は成名に媒酌を依頼する（七言二十句）。朝貴は王氏と再婚するが王氏は長寿の毒殺を図るが誤って朝貴が飲む。王氏は驚いて叔父王必高に相談する（七言十二句）。王氏は必高に銀十錠を渡す。必高は朝貴を救う口実に長寿の首を取れとそそのかす（七言十六句）。侍女秋魁がこれを聞く。秋魁は長寿に学校に逃げるよう勧める（十言十句）。長寿は従者の迎えを拒絶する。先生は長寿を叱って帰宅を命じるが長寿は事情を打ち明けて救いを求める（七言二十六句）。先生は長寿を

先に帰す。長寿は悲嘆して帰宅し王氏は長寿を捉えて手足を釘で打つ〔十言三十六句〕。先生は主人と酒を飲み怪異を見て長寿を訪ねる。先生は長寿を介抱する〔七言二十句〕。先生は悪人を捉えさせる。必高は朝貴を救うために祈願していると弁解するが先生は許さない〔十言二十句〕。先生は必高と祈禱師を捉えて県城に入る。王氏は先生に許しを乞う〔十言八句〕。先生は賄賂を受け取らず陳府尹に訴える。秋魁は王氏らの犯行を証言する〔十言二十句〕。王氏らは処刑される。」

〔溺女慘報〕——二十一～二十九葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に女子を溺死させれば天罰を受けると説く〔七言十二句〕。宋代、徐流玉には四男三女があったが、夫婦は二度女子を墮胎したため妻喻氏は奇病を患い因果を悟った。喻氏は泣いて子女に因果を説くと四男は家計のため仕方なかったと言い三女は母親に替わりたと言おう〔七言四十二句〕。女子二人は四男を殺害し一家は衰退する。流玉は喻氏に薬を与えて喻氏は懐妊するが死んだ八人が命を奪いに来る。喻氏は衆人に因果を語ると肉包を出産して倒れ、流玉が肉包を切ると夫婦は亡霊に命を奪われ財産は衆人に奪われる〔十言三十句〕。

〔木匠傲官〕——二十九～三十三葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に人は志気を示すべきと説く〔七言十八句〕。「昔、重慶（四川）の貢生何興の三女秋香は周木工に嫁ぎ夫婦は何興六十歳の祝賀に赴く。夫婦は姉夫婦たちが豪華な祝儀を贈るのを見て恥じる〔七言二十句〕。何興は三人の女婚の身分に應じて寿字詩を詠ませる。大女婚と二女婚は何興を喜ばせ、木工は詩を詠めず何長生が代わりに詠

んでからかうが、何興は戒める。長生は木工の帽子の頭に人参を置き衆人はそれを見て笑い秋香は見て不愉快になる〔七言五十句〕。秋香は木工に帰宅を促す。秋香は木工に読書を勧め木工は読書に励む〔七言三十二句〕。秋香は銀四十両を作って木工に渡す。木工は旅に出て鳳翔府（陝西）の拳人を師と仰ぐ〔七言十四句〕。拳人周全義は木工を継謙と名付けて教育する。秋香は苦菜を食べて舅姑を養う〔十言二十句〕。数年後に姑が昏倒する。姑は氣遣う秋香に平静を装う〔十言十句〕。秋香は察知して割股を決心する。秋香は神に祈って左腕を削ぐ〔十言十二句〕。秋香はスープを作って姑に饗し帰宅した継謙の前で昏倒する。秋香が腕の肉を割いたと告げると継謙は感謝する〔十言三十句〕。秋香は継謙の成果を問う。継謙は発憤して翰林に及第した経緯を語る〔七言三十二句〕。継謙は以前の木工の服装で何興七十歳の祝賀に赴く。叔父何桂林は継謙の無能を笑う〔七言八句〕。大女婚と二女婚は詩を詠んで木工を笑う。継謙は詩を詠んで二人を小人と笑う。そこへ官誥が届き夫婦は着替えて何興に挨拶する。大女婚は継謙の任官を祝い非礼をわびる〔七言十二句〕。二女婚も非礼をわびる〔七言十二句〕。桂林も反省して許しを乞う〔七言二十句〕。何興は悔蔑ゆえに発憤があったと継謙に三人を許させる。」

〔救女獲福〕——三十三～四十四葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に墮胎溺女の因果を説く。「高県（四川）の金三期は允成仁の殺生を戒める言葉聞かない。成仁は殺生の悲惨を説く〔七言二十二句〕。三期は妾が生んだ女子を溺死させようとする。三期

は妾が拒絶したので怒る〔七言八句〕。近隣の尹慈の妻任氏が諫める。任氏が諫めるが三期は聞かない〔七言二十八句〕。任氏は女子に喜姑と名付けて育てる。三期は姦通した寡婦に墮胎させて殺したため寡婦の亡霊に追われて誤って我が子を撃ち殺す。三期は子の死を悲しむ〔七言十四句〕。亡霊は三期につきまとう。三期は自分の悪行を後悔して亡霊に許しを乞う〔十言三十六句〕。三期は端公（巫師）にお祓いをさせるが効力はなく家も焼失する。喜姑は河南知県王大経に嫁ぎ大経は尹慈の命を受けて勸世歌を作る。勸世歌では溺女の罪深さを語る〔七言二十八句〕。】

〔活変猪〕—四十九〜五十三葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に不正な財を得ても結局は返済することになると説く〔七言四句〕。〔咸豊初年、湖北宜昌府鶴峰州の汪心義は貪欲で進学した二子を自慢していた。心義は富裕を自賛する〔七言十四句〕。周廷芳は食品店（槽坊）を開くため心義に銀五十両を借りに来る。廷芳は心義に金を借り酒を勧められて忘れて帰るが心義は知らぬと言い廷芳は毎月の利子を払えず家と豚を担保に返済しようとする〔七言三十八句〕。天は怒って心義の靈魂を豚に入れる。番頭は主人が豚に変身しているのを見て帰宅して告げると心義は応報を知る〔七言三十四句〕。子継祖は心義に善行を積めと諭す。心義は隠した銀を廷芳に返して善行に努め神仙となる夢を見る〔七言四十四句〕。】

〔夢変猪〕—五十三〜五十七葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に貪欲を戒める〔七言四句〕。前段「活変猪」の続

篇。〔咸豊十一年（一八五八）、山東済南府の王其敏と妻張氏は傭人を勤めて銀数十両を稼いだ。夫婦は相談して高利貸しを始める〔七言十二句〕。周上元が田圃を買うため銀十両を借りに来る。上元は其敏を家に招待して金を借り其敏は酒に酔って契約書を落として帰り上元に告げるが上元は契約書はなくても金は返すと答える〔七言五十六句〕。だが期日になると契約書を要求し告訴しても構わないと言う。誠実な其敏は裁判と聞いて泣き寝入りするが過往神が天庭に上奏し上皇帝は過往神に応報を下すよう命ずる〔七言十四句〕。過往神は屠殺される其敏の豚に上元の靈魂を貼り付ける。屠殺人が肉を割くと上元は痛みに堪えられない〔七言八句〕。劉七爺が肉三斤を切らせる。屠殺人が肉を切つて量るが七爺はさらに油皮を切らせたため上元は痛くて堪らず目が覚めて改心し其敏に金を返す〔七言四十句〕。】

〔烈女専夫〕—五十七〜六十四葉。半葉八行、行二十字。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に女子は貞節が重要だと説く〔七言四句〕。〔乾隆年間、河南開封府の周建新は遊興にふけり妹月英の婚約者陳瑞亭の留守中に月英に再婚を迫る。月英は泣いて拒絶する〔十言十四句〕。建新は瑞亭は死んでいると言う。月英は殺されても再婚は嫌だと抵抗する〔十言十句〕。建新は瑞亭の帰りを待つなら家を出ると迫る。月英は兄なら妹を養うべきだと主張する〔十言十句〕。建新は月英に衣服を脱いで出ていけと迫る。月英は衣服を脱いで兄に渡し父母の霊前で泣く〔十言十句〕。乳母は主人から託された銀三百両を月英に見せてともに上京し月英の書信を赤雲寺に仮寓する瑞亭に見せる。書信には銀三百

両で読書して成功するよう書かれていた〔十言十二句〕。瑞亭は科擧に合格して翰林を授かり共に襄陽府に赴任する。建新は強盜になり瑞亭の船を襲つて捕まる。建新は水夫で盜賊と間違えられたと弁解する〔十言十六句〕。瑞亭は家族について尋ねる。建新は妹月英と陳郎の婚姻に尽力したと答える〔十言十二句〕。建新は犯行を自供しない。建新は拷問を受ける〔七言八句〕。月英は建新の前に現れる。建新は驚いて助けを求める〔七言十二句〕。月英は建新が強盜を犯した理由を尋ねる。建新は家産を蕩尽して悪事に手を染めた経緯を自供する〔七言十句〕。月英は家名を汚した兄を怒る。月英は兄を非難する〔七言十四句〕。建新は許しを乞う。月英は兄の悪行を許せないと言う〔七言十二句〕。月英は兄妹の情に負けて瑞亭に許しを請い建新は門番として雇われる。

〔陰陽得妻〕——五十七〜六十四葉。半葉八行、行二十字。<sup>16</sup> 宣詞は代言体と叙事体。「大清雍正年間、湖北省沙市（湖北）の貧家の少年胡成名は便所で拾った銀十四錠百両を持ち主に返して父大進に報告する。だが父は怒つて成名を追い出す〔十言十四句〕。成名は張布客に随行して家を出る。大進は愚かなことをしたと後悔する〔十言二十句〕。帰州（湖北）の陳員外の錢舗で徒弟となる。三年後に成名は帰郷を申し出るが員外は留める〔七言三十二句〕。員外の子香保は身体不自由を隠して曾拳人の娘と婚約するが婚礼に本人の迎えを要求される。員外はどう対処するか憂慮する〔七言八句〕。媒酌人は代人を立てるよう進言し員外は成名を選ぶ。成名は断るが員外は涙を流して説得する〔七言

二十二句〕。成名は仕方なく応じるが悪天候で帰還できず焦る。曾拳人は新郎を気に入つて曾家で挙式させる〔七言二十八句〕。成名は三晩床に入らない。新婦は母に事情を話す〔七言十六句〕。拳人は成名に理由を質す。成名は仕方なく事情を話す〔十言十四句〕。拳人は成名に素性を尋ねる。成名は家を出て後のことを語る〔十言二十二句〕。拳人は拾い主に再会できたのは応報だと喜ぶ〔十言十四句〕。拳人は娘にふさわしい婿だと言う。拳人は媒酌人を帰して陳員外の説明を求める〔十言十句〕。媒酌人は伝言に帰る。員外は洪水が引かず焦っていた〔十言十六句〕。員外夫婦は拳人と成名を帰州に訴える。拳人は経緯を陳述する〔十言二十六句〕。官は関係者に尋問する。官は員外の過失を指摘する〔十言十四句〕。官は員外に結納を返し拳人の娘と成名の婚礼を認める。官は成名の徳行を称賛する〔十言十句〕。成名はいっそう学問に励む。〕

卷四「兩世合指」——版心「勸善録 兩世合指」。五〜十葉。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に因果が疑いなきことを説く〔七言二十二句〕。「大明天啓年間、湖北荊州沙市（湖北）の胡從善は家が貧乏であった。從善は母鍾氏を慰める〔十言十六句〕。母は死期を悟つて從善に別れを告げる〔七言十二句〕。從善は母を埋葬する。從善は母の死を悲しむ〔十言十四句〕。從善は三年の墓守を終えると善行に努め道觀の修築に寄付するが失明する。從善は乞食をして生活する〔七言三十二句〕。張道人はわけを尋ねる。從善は経緯を語る〔七言十八句〕。從善は道人に従つて道觀に行く。從善は参拝客に乞食する〔十言十二句〕。從善は落雷で死亡して右指が切れる。道人たちは從善がなぜ悪報を受けたか不

思議に思う〔十言十六句〕。老道長が二十年後にわかると語る。従善は開封府の徐為仁の家に転生して荆南道巡撫を授かるがその右指は切れていた。巡撫は道観に来て因果を説いた錦囊を見る〔七言八句〕。巡撫は道人に説明を求める。道人は巡撫の前世を告げ巡撫は因果を悟って隠棲して修行する〔十言三十四句〕。

「因妻免禍」――版心「勸善録 因妻免禍」。十六～十九葉。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に賢妻は夫を戒めるべきだと説く〔七言十四句〕。「乾隆年間、開封府（河南）の酒屋周明は鵲を可愛がっていた。周明は外出に際して妻雲氏に世話を命じる〔七言十四句〕。だが鵲は飛び出して向かいの仕立屋王老公が打ち殺す。雲氏は死骸を鳥籠に入れて夫の帰りを待つ。周明は帰宅して雲氏を打擲するが雲氏は堪えて真実を話さない〔七言三十八句〕。その時老公は眉疔ができて病気になる蘇生する。老公は周明に前世の宿怨を雲氏が調停したと語る〔七言十六句〕。老公の死体は毒気で焦げる。周明は妻に二度と打擲しないと誓って夫婦は仲直りし幸福な家庭を作る〔十言二十二句〕。」

「応該餓死」――版心「勸善録 応該餓死」。十九～二十三葉。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に勤儉を勧める〔七言十二句〕。「宋の包文正公が冥界で裁判していた時、餓鬼が転生して再び餓死することを望まず、財神を証人として富貴を保証させる。餓鬼は鄖陽府（湖北）の農民張方可の子張富として転生するが怠惰を改めない。方可は説教するが閻魔から富貴は保証されると反論する〔十言二十四句〕。方可は真に受けて怠惰になって餓死する。張富は理由が分からずに嘆息する〔十

言二十二句〕。張富は生活を改善せず妻まで売ってしまう。張富は財神が約束を守らないと言って怨む〔十言十二句〕。張富は憤懣やるかたなく閻魔殿に至る。張富は包公と財神に不満を述べる〔七言二十句〕。包公は財神に事情を尋ねる。財神は怒って張富の怠惰を罵り包公は張富を永久に地獄に落とす〔七言三十六句〕。」

「遺画成美」――版心「勸善録 遺画成美」。二十三～二十八葉。宣詞は代言体と叙事体。「大宋順天府香泉の倪守謙は先妻何氏の子善述は側室梅氏の子善繼を守謙の子と認めなかった。守謙は臨終に善述に家産を譲って善繼のことを托し善述も承諾する〔七言三十六句〕。梅氏は再婚しないと誓い守謙に母子の庇護を求める。守謙は善述から守るためだと語り絵図を清官に解読してもらおうと告げる〔七言二十句〕。善繼は成長して善述に家産の分与を求める。善述は聞かず善繼は母と相談して包公に訴える〔七言三十八句〕。包公は母子に事情を尋ねる。梅氏は包公に訴える〔十言十六句〕。包公は絵図を見て母子を帰宅させる。包公は絵図の中に書簡を発見して事情を知る〔十言三十四句〕。包公は母子の住む小屋に行って守謙から千金の在処を教えられる様子を示す。包公は地面を掘らせると銀五千両が出る〔七言十二句〕。包公は善繼に収納させる。包公は続けて掘らせるとまた金銀が出る〔七言十四句〕。包公は善繼に与える。梅氏は包公に感謝する〔七言十二句〕。包公は善述に争わないよう言い置く。後に善述は家が衰退し善繼がその家産を管理する〔七言二十句〕。」

「好賢妻」――版心「勸善録 好賢妻」。四十二～四十六葉。宣詞は代言

体と叙事体。冒頭に夫婦和合を説く〔七言四句〕。「湖北省当陽県（湖北）の楊景春は父母を埋葬して後に字を売って生活する。景春は貧窮生活を恥じる〔七言十二句〕。景春は乞食の頭領柳緒から娘瓊芝の婚に求められる。景春は貧困な自分には結婚できないと答える〔七言二十句〕。瓊芝は景春の詩を愛でる。柳緒は瓊芝との結婚を打診し景春は喜ぶ〔七言十四句〕。柳緒は景春を同居させる。景春は科擧に及第して善化県令を授かる〔七言二十句〕。景春は乞食の娘が妻であることを恥じる。景春は瓊芝だけを赴任に同行させる〔七言十句〕。景春は瓊芝を荊江に突き落とす。景春は船員に救いを求める〔七言四句〕。景春は赴任の後に死体を探すと言う〔七言四句〕。瓊芝は神助で王路口の岸边に流れ着く。官船の主人は死体を引き上げさせる〔七言四句〕。主人は長沙府の柳知府で瓊芝は船上で息を吹き返す。知府は瓊芝に事情を聞く〔七言八句〕。瓊芝は景春が賤しい身分を嫌ったと考える。瓊芝は知府に話し知府は憤る〔十言十八句〕。夫人は瓊芝を養女として景春に嫁がせれば危害は加えないだろうと言う。知府は長沙に到着する〔七言四句〕。府尹は娘との結婚を許し二人を引き合わせ景春は亡霊かと恐れる。府尹は景春を弾劾すると言うが夫人が許しを求める〔七言二十六句〕。府尹は景春に娘を軽んじると告げる。景春は二度と間違いは犯さないと誓う〔七言十八句〕。」

「好兄弟」―版心「勸善録 好兄弟」。四十六〜四十九葉。宣詞は代言体と叙事体。冒頭に兄弟喧嘩を戒める〔七言四句〕。「歴城県（山東）の胡友成には子が無いが妻張氏が妾を娶ることを許さない。弟友

信は次子禄児を同伴して友成の誕生祝いに来る。友成は張氏に妾を迎えるよう勧めるが張氏は家庭が崩壊すると言いつ禄児を養子にと主張する〔七言十六句〕。友信夫妻はわざと禄児に張氏を母と呼ばず家産はいずれ自分のものと言わせる。張氏は怒って意地になって妾を迎えると言う〔七言十句〕。友信夫妻は密かに費用を媒酌人に渡す。張氏は媒酌人に若い妾を要望し媒酌人に不足分の費用を借りる〔七言八句〕。媒酌人は友信夫妻に報告し友成の妾はめでたく男子を出産する〔七言二十四句〕。媒酌人は友信夫妻が費用を出したと告げる。媒酌人が友信夫妻はわざと張氏を怒らせ妾を娶らせたと教えると友成夫妻は始めて感謝し両家は繁栄する〔七言四十八句〕。」

「好朋友」―版心「勸善録 好朋友」。四十九〜五十二葉。宣詞は代言体と叙事体。唱はすべて七言四句。冒頭に交友には財産を関わせないと説く〔七言四句〕。「武昌省黄州府（湖北）の崔桂が蘇州に葉売りに出て江西の古い師の許午と出会う。崔桂は年末なのに金が無いと言う〔七言四句〕。許午も儲けが無いと言う〔七言四句〕。許午は崔桂に百文を預ける。崔桂は鶏と米を買って帰る〔七言四句〕。二人はその日の食事を済ます。崔桂は泥土で雄鶏を作る〔七言四句〕。二人は四十個ほど作って寒山寺で売る。それらを子どもが喜んで買う〔七言四句〕。半日で完売する。その金で食事をする〔七言四句〕。残った鶏は料理店に売る。一月で儲けが出る〔七言四句〕。崔桂は餡かけ豆を売ろうと提案する。蘇州には餡かけ豆が無いと言う〔七言四句〕。崔桂はその儲けを元に緞子を売ることを提案する〔七言四句〕。二人は大儲けす

る〔七言四句〕。彼らの売値は市価より安かった。一年で六百両設ける〔七言四句〕。二人は服屋に反物の売買を任される。彼らは店に転居する〔七言四句〕。その後二人は家庭を持ち両家は繁栄する。(以下省略)〔

#### 四 結論

『勸善録』は湖北荊州府荊山県張接港の両儀堂が復刊した宣講書である。神明(趙大真君)の序文があることから民間の善堂が編集した書である。現在のところ版式が同じく所蔵者が異なる一卷と写本形式の三巻、一卷とは版式が異なる四巻の存在が確認されているが、二巻が未発見のため故事の全数は不明であり、一卷に十四篇、三巻に十四篇、四巻に十四篇程度を収録していたところまでしか明らかでない。その中には湖北の信徒の義捐によって刊行された「誠孝格天」「孝婦逐疫」「逆子遭譴」(以上、当陽県曾得宗刊)、「宣講解冤」「施公奇案」(以上、孔継品刊)を含んでいる。また収録した故事の地域分布は湖北が巻一(8/14)、巻三(7/14)、巻四(4/7)と大半を占めている。なお巻一には代表的な宣講書『宣講集要』巻十四から故事を選出している。<sup>20</sup> これらの故事は三巻の2篇を除いてそのほとんどが因果応報を説き、代言体と叙事体をまじえた説唱形式で表現されている。

#### 注

- 1 古籍図書網 [www.gujitoku.com](http://www.gujitoku.com) にも同じ書名で収録する。
- 2 明万曆『湖広総志』巻三十三水利二「附開復荊承二府属穴口疏」に、「該府所属旧有小河口、丁家河、泗港口、張接港、黑流渡、漁泛口、潭子口等処流入各湖。」参考：尹玲玲『明清兩湖平原的環境變遷与社会应对』(二〇〇八、上海人民出版社) 上篇「過度墾殖与恶性循環：生態環境的演變(下)」第二章(下)三「围墾—湖淤—洪災的恶性循環与時空特点」。現在、荊山県に属する。
- 3 ……嘆時殊勢異、顛倒錯乱、如此其極、惟有安天命、惟有講聖論。至於彰善癉惡、豈可拘泥。況所集之案、均皆實迹、可以作人榜样、何妨講習。莫言粗俗不雅。歌詞大有關係、須知雅俗共賞。……
- 4 「司命顕化」の収録位置が上海図書館所蔵本と異なるが、此方が本来の位置であったと思われる。
- 5 「賢女周月英が陳姓の官吏に嫁ぎ、兄周建新の悪行に対して許しを乞う」という内容。
- 6 「船客が銀十三両で人助けをして科挙に及第する」という内容。
- 7 『宣講珠璣』巻三「鬼避孝婦」(破迷子著)は同工異曲。
- 8 不詳。
- 9 原典は『初刻拍案驚奇』巻三十五「訴窮漢暫掌別人錢、看財奴刁買冤家主」(元雜劇『看錢奴買冤家債
- 10 原典は『聊齋志異』巻九「折獄」。
- 11 「淫惡巧報」は『宣講集要』「淫惡巧報」の前半部を省略している。

『宣講集要』「淫悪巧報」の前半部では、湖北省荊州府江陵県西関外万城千街の黄自品が何伯春と楊文富に託して四川に花布（更紗）を販売させるが、伯春が河に落ちて死に、文富が遊蕩して資金を使い果たしたため、落胆した自品の妻が自害し、子復順がそれまでの遊蕩を反省して聖諭を宣講して母を済度したため、後に王光宗の子春生が殺害された事件でも、忠孝の人として容疑がかからないという内容を語る。「淫悪巧報」はもと長編作品であったと思われる。

12 原典は『聊齋志異』巻七「胡四娘」。原作では孝思の父母については詳述せず、孝思は劍南（四川）の人である。孝思は三女ではなく四女と結婚する。

13 わずか半葉あまりの故事で余白を埋めた観がある。

14 これ以後の地獄巡りの描写は省略する。

15 湖北省荊州府江陵県か。

16 李洪源氏蔵複写本では、四十六〜五十四葉。

17 包公閻魔伝説。次の「遺画成美」と対になる説話。

18 原典は『龍凶公案』七十七回「扯画軸」。『緩歩雲梯集』巻一「画裡藏金」、『宣講珠璣』巻一「鬼断家私」は同工異曲。

19 原典は『古今小説』巻二十七「金玉奴棒打薄情郎」。なお「金玉奴棒打薄情郎」は宋代、杭州、莫稽が金玉奴を裏切る故事であるが、湖北の故事に改編している。

20 『宣講集要』十五巻は巻十三までは巻ごとに故事を『聖諭』十六條に配して掲載しているが、巻十四はそうではなく、各故事の冒頭

に『聖諭』第何条と明記していて、補巻の意味を持っている。また咸豊二年（一八五二）の序文を冠しているが、巻十四には咸豊九年の故事（『宣講解免』「淫悪巧報」）を掲載しており、咸豊九年以後の刊本である。

（阿部泰記 山口大学大学院東アジア研究科教授）